

ミス・カートメルの親戚

ミセス・キャサリン・カーのお話

ミス・カートメルの家系図をめぐって

昨年11月、創立125周年記念にあたって中高部母の会がカナダからご招待したミセス・キャサリン・カーにお話をうかがいました。

…… * …… * …… * …… * …… * …… * ……

ミス・カートメルを調べ始めたきっかけ

私は、数年前まではこの学校のことも、まして自分の親戚筋にあたる人が日本で学校を始めたことも、全く知りませんでしたので、知ったときには大変驚きました。

どうしてミス・カートメルと私とのつながりがわかったのか、お話ししましょう。

2001年、イギリスのケンブリッジ大学で日本文化について学んでいる女性から私の住むソロルド市に宛て、ミス・マーサ・カートメルの子孫がいらないか、という手紙が来ました。その女性の目的は、日本が開国間もない時代に、なぜ西洋から日本へ女性が渡ったのか、その動機を知ることでした。私の旧姓はカートメルでしたので、ソロルドの歴史家が私に照会してきたことから、つながりが始まったのです。

彼女はマーサ・カートメルの名から、同姓同名の別人をたどっていました。その人はカトリックであり、私は父からひいおじいさんの妹にメソジストの宣教師がいたということだけは聞いていたので、間違いに気づきました。そこ

で親類に手紙を出したところ、40マイル離れたハミルトン市に住んでいたメソジストのミス・マーサ・カートメルの存在を知りました。そのときはまだ東洋英和のことは知らなかったのですが、さらに、その親類のご主人が彼女の写真を持っていたのです。私は驚いて、「どこでそれを見つけたの？」と尋ねますと、「コンピューターだ、センテナリー教会の」と言うではありませんか。そこで、不慣れなコンピューターで検索をすると、彼女の全ての物語がそこにありました。お母さんが亡くなったこと、家族が離れ離れになったこと、日本に行って女子校を創設したことなど…。でも、多くのことがわかったのは最近のことです。私は歴史に興味がありますし、家族の家系図を調べるのも面白かったので、9ページにわたる家系図を調べ上げたのです。



ミス・カートメル

ミス・カートメルの家系

ミス・マーサ・カートメルの父にあたるジェームズ・カートメルはイギリスからの移民で、同じくイギリスからの移民のサラ・ロビンソンと結婚し、7人の子を持ちました。マーサは5番目で彼女の一番上のお兄さんであるウィリアム・ロビンソン・カートメルが私の曾祖父にあたります。

母親のサラが亡くなったとき、ウィリアムを含む年長の3人は父と一緒にソロルドに残り、マーサとメアリーはサザランド家に引き取られました。サザランド家は、マーサの母の姉であるマーガレット・ロビンソンが嫁いだ家です。マーサはサザランド家の人達とハミルトン市で成長しました。



ミセス・カーへのインタビュー
左よりミスター&ミセス・カー、森真理幼稚園園長

どうして私達はマーサのこと、彼女の働きを知らなかったのでしょうか？カートメル家とサザランド家の交流がなくなってしまったのは、別の町に住んだためでしょうか。そればかりでなく、私の曾祖父のウィリアムは結婚してカトリックになり、以来私達の親族はカトリックの信者です。当時は宗派が異なるとコミュニティのつながりはなかったのでしょうか。



カナダ語学研修の生徒達とミセス・カー (左端) ミス・カートメルの墓地にて (2008年7月)

ミセス・カーと東洋英和との出会い

私は親戚のことがわかったのでワクワクして、地元ソルルドの歴史協会を訪れ、調べたことを話しました。彼らは、マーサがソルルド生まれなので、とても喜んで調査を手伝ってくれました。私はハミルトン市のセンテナリー教会にも自分のしていることを知らせに行きました。

そして、昨年(2008年)7月27日、招かれて教会に行ったところ、なんと東洋英和の高校生達も(カナダ語学研修で)そこに来ていたのです。墓地に一緒に行き、マーサの父ジェームズも、同じ霊園に眠っていることを初めて知りました。翌日私は引率の先生お二人をソルルドに

案内し、マーサが住んでいたと伝えられる家と合同教会を訪れました。とてもとても素晴らしい日でした。その後、メールでやり取りをしていましたら、5月に招待を受け、こうして日本に来ているのです！！

私の調査のほとんどはセンテナリー合同教会のウェブサイト、そしてトロントにあるカナダ合同教会資料室からの情報に拠っており、私が自分で調べた調査はたったひとつだけなのですが、ご紹介しましょう。当時の新聞の死亡告示を元にソルルドの合同教会に行き、記録を調べたところ、秘書の手紙を見つけました。1890年に講演に呼んだミス・カートメルを囲んでお茶の会を開いていたのです。彼女が何を話したのかを知りたかったのですが、それはわからず、14ドルがお茶代で、5ドル83セントの支出があったという会計の記録だけが残っていました。そのうち、5ドルはお話ししてくれたミス・カートメルへのお礼、83セントは印刷代でした。当時の5ドルは現在の500ドル相当ですから、円に直すといくらでしょう？

(質問) あなたはミス・カートメルはどのような方だったと思いますか。

とてもとても深い信仰に立ち、ちょっと冒険心がある方で、大変知性にあふれていました。それは彼女の手紙を読むとわかります。そして独立心のある方でした。

マーサの生涯をみると、父親も伯父も働き盛りに亡くなり、近しかったいとこのエリザベスも夫を40歳で喪っており、残された家族は自分で自分の生活を切り盛りしていかなくてはなりません。また、彼女が出発する時の壮行

会で、これから日本に行きます、という挨拶さえ、本人ではなく男性の従兄がしています。カナダにおいてすら、まだ女性の立場が低かったそんな時代に、彼女は宣教師としてはるばる日本にやって来たのです。

そればかりではありません。カナダの教会は日本の女性達のための学校を開くのにお金を出してくれませんでした。WMS (Woman's Missionary Society カナダ婦人ミッション) と男性の宣教師の間には、お金の使いみちについて意見の相違があり、女子校を開き経営するためのお金は女性達が工面したのです。ですから、彼女は2回目に日本から帰国した後、日本で教える資質があつて、彼女の仕事を続けてくれる教師を送るための資金を集めるためにカナダを東奔西走しました。

こうしたことから、彼女がとても自立心旺盛な人だったということが考えられます。

ミセス・カーも学校の先生だった

ミス・カートメルは教師でしたが、帰国してから教職には就きませんでした。私はそのことに興味を覚えました。というのも、私は33年間、小学校で教えていました。退職して11年になります。小学校では、主に特別クラスを担当し、中学年の読書支援など生徒の勉強面でのサービスもしていました。そして歴史が好きでした。マーサ・カートメルのことを知ってから、夫に呆れられてしまうほど日がな一日コンピューターに熱中し、駆使できるようになりました。マーサ・カートメルのおかげでパソコンの検索などの技術を向上させ、頑張る気が起きたのです。



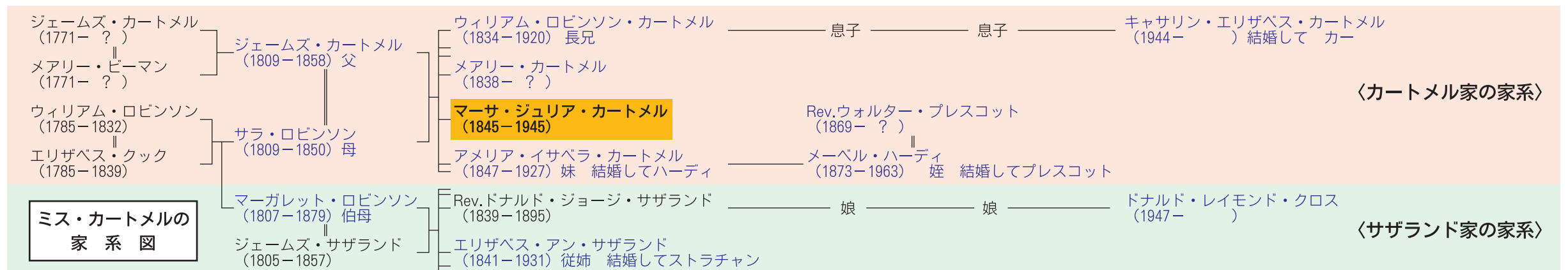
おそらくマーサが幼い頃暮らした家 (ソルルドにて 2008年)

帰国後のミス・カートメル

彼女はとても日本を愛していましたが、当時のカナダの情勢では日系人の処遇は決まっていたとはいえなかったようです。それでミス・カートメルはカナダの東海岸から西海岸まで旅行しては、彼女や他のミッショナリーが日本でしていることについて話をしました。西海岸のバンクーバーやプリティッシュコロンビアでは、日本人の難民と一緒に仕事をしました。教会の記録によると、80歳代でもプレゼンテーションを続けていたということです。

私の親類のドン(ドナルド)・クロス氏によると、最近サザランド家で発見されたトランク(次ページ写真)にはマーサが帰国後に書いた山のような手紙が残されていました。サザランド家はそれをずっと保管していたのです。彼はマーサの手紙を活字に直してくれていて、私にも見せてくれました。ちなみに、彼はマーサの墓石を作るのに、お金を集めた人です。

ミス・カートメルが帰国後に一緒に暮らしたのはサザランド家の従姉のエリザベスです。エ



[青字の名前は文中に出てくる方 Rev.はReverend(牧師)の略]

リザベスが亡くなった後は、トロントで(99歳で亡くなるまで) プレスコット家の人々と暮らしました。それは姪にあたるメーベル(妹アメリカの娘)の家で、姪の夫は牧師のウォルター・プレスコットでした。プレスコットはオンタリオ州にある地名でもあり、マーサの両親が会って結婚した場所はプレスコットでした。

トロントに移った頃はマーサは85歳を越えており、目と耳が不自由で、周りの人は大きなラップパ状のホーンを彼女の耳に当てて、大声で話してあげなければなりません。しかし頭の方は明晰で、88歳になっても、教会でスピーチをしていたのです。声はとてもはっきりしていて、内容も明瞭でした。



ミス・カートメルのトランク

ソロルドの町はナイアガラの滝の近く

マーサが生まれた私の町ソロルドは人口1万7千人ほどの小さい町です。ナイアガラの滝のすぐ近くにあって、車で10分ほどです。

マーサの父も長兄である私の曾祖父も、石切り職人でした。ソロルドの2番目の運河はマーサの父が造り、今も残っています。3番目の運河は私の曾祖父が石を切った運河です。ソロルドでは、歴史的建物を多数保存していますが、由来はよくわかっていないのが残念です。



展示中の「ミス・カートメルの聖書」を見る
ミス・ポール(左)とミセス・カー(右)

ミセス・カーは、ミス・カートメルや東洋英和の発見、そして日本への招待と次々起こったすばらしい出来事に興奮しました、と楽しそうに語って下さいました。彼女が調べ上げてくださったカートメル家とサザランド家の家系図や情報は、ミス・カートメルの人物像をより鮮明に私達に示してくれる貴重な資料となりました。折しも私達が必死に取り組んでいました『カナダ婦人宣教師物語』にもその情報をさっそく取り入れることもできました。来訪中終始行動を共にしていらしたミスター・カーは、ミス・カートメルが乗船したシティー・オブ・トウキョウ号と日系移民についてお話しくださいました。カーさんご夫妻と中高部母の会に感謝いたします。

[インタビュー：2009年11月7日 東洋英和幼稚園にて インタビュアー：森 眞理(東洋英和幼稚園園長・史料室委員会委員長)]
テープ起し・翻訳 協力：高橋 基治
(大学教授・史料室委員)
文責：酒井 ふみよ(史料室)

遂に刊行 『カナダ婦人宣教師物語』 販売のお知らせ

73号で内容をご紹介した『カナダ婦人宣教師物語』が2月下旬にできあがりました。すでに手に取られた方からは、新しい切り口の学院史であるこの本へ良い評価をいただいております。まだお読みでない方はどうぞ下記の方法でお買い求めください。

販売価格：1冊1,000円(郵送希望の場合は1,200円)

郵送希望の場合：郵便振替口座へ必要事項記入の上、お払い込みください。

直接購入の場合：学院各部でお買い求めください。
六本木 各部事務室、法人事務局史料室、院長室
生涯学習センター、ガーネットハウス鳥居坂
横浜 大学ブックセンター

払い込み先 00120-3-685741
加入者名 学校法人東洋英和女学院
金額 送料が別途1冊につき200円かかります
通信欄記入事項

- ・ 『カナダ婦人宣教師物語』 購入希望
- ・ 希望部数
- ・ 卒業生の方は卒業年・卒業の部・(旧姓)

資料紹介 17

ミス・カートメルから齋藤春子宛ての手紙

1964年創立80周年にあたり、初期卒業生齋藤春子は彼女に贈られたミス・カートメルの聖書と手紙を学院に寄贈した。ここでは、その手紙の全文を原文と訳文で紹介したい。



ミス・カートメル

Viscount and Viscountess Saito,
Seoul - Korea

52 Markland Street Hamilton, Ont. Canada
Dec.20th. 1930

Dear Countess Saito,

It was with great surprise and unspeakable pleasure that I received your kind remembrance the calendar for 1931. I have very fond remembrance of you, as dear Nirei san and some time ago - The son of Mrs.Yukino (ne Yoshida OYu san) wrote me a letter with which he sent me your photograph. I was pleased indeed. I would gladly have acknowledged it but I had no address. I feel greatly honored the trouble you have taken sending me this assurance of your esteem.

It sheds a bright light upon my old age. A week ago, Dec.14th.1930, I celebrated my 85 years of life or rather my relatives gave me that pleasure. I thought of my honored father and mother at that time now more than 80 years in Heaven and also my good foster parents, dear Mrs.Strachan's father and mother, who so led me to Christ.

I remembered The Heavenly Father's promise found in Hebrews 11:40 " God having some better thing for us, that they without us should not be made perfect." I love to think, that even in Heaven, the joys there do increase the love of our relatives for us. Christ Himself helps them to remember us. Death has no power there. Mrs. MacGillivrag told all the WMS members of your great kindness to her, and also of your enquiries for me, which made me very glad indeed and thank you.

I must not forget to mention. I am sending by this mail my Bible.

It was presented to me, just before I left home for Japan. I prize it very much for the sake of the giver and more because of the delight of studying in Japan in order to teach again the Word of God.

Before I left Japan my eyes troubled me very much, so that I could not read much. Very soon after I reached home, my eyes became much worse, until I lost the sight of my left eye. Now my right eye is doing me good service, so that I can see to read good print. But this Bible I have not used. I must have larger print. If you can read English and wish to use it I will be glad if not give it away to any one willing to study God's message of love. Dear Viscountess I must apologize for intruding this long letter upon you.

Please forgive me.

Your devotedly,
Martha J. Cartmell

(原文のまま掲載)

(訳文)

朝鮮 ソウル
齋藤子爵、子爵夫人

カナダ オンタリオ州 ハミルトン
マークランド通り52番地

1930年12月20日

親愛なる齋藤子爵夫人

あなたからのお心づくしの来年のカレンダーをいただき、驚きと言いきりし難い喜びに包まれました。あなたのことは、かわいい仁礼さんとして、とても好ましくよく覚えております。しばらく前、雪野さん(旧姓吉田お勇さん)の息子さんが私にお手紙をくださり、一緒にあなたのお写真を送ってくださったのです。本当に嬉しゅうございました。ぜひお礼を申し上げたかったのですが、ご住所がわかりませんでした。この度あなたがお志をお送りくださるためにご苦労されたこと、大変光栄に存じます。

明るい光が年を重ねた私を照らしてくれております。一週間前の1930年12月14日に、私は85歳の人生を祝いました。といいますが、親類の者たちが祝ってくれ、その喜びを与えてくれたのです。その時私は、今はもう80年以上も天国にいる、尊敬する私の両親のことや、また私のよき養父母であり私をキリストに導いてくださったストラチャン夫人のご両親のことを考えました。

ヘブライ人への手紙11章40節にある「父なる神の約束」が思い起こされました。“神は、わたしたちのために、更にまさったものを計画してくださったので、わたしたちを除いては、彼らは完全な状態に達しなかったのです。”私は、天国においてさえ私たちのために喜びが親



ミス・カートメルのめがね



齋藤春子

類の者たちの愛をいや増し加えてくださると考えると嬉しくなります。キリストご自身が、彼らが私たちを憶えていてくれるように力を添えてくださっています。死は何ほどの力もありません。

マクギルヴァーグ夫人は、すべてのWMSメンバーに彼女に対するあなたの優しさ、私に関する照会についても述べられました。そのことに関し心から嬉しく思うと同時に、あなたに感謝しております。

触れておかなければならないことがあります。この手紙とともに、私の聖書をお送りします。その聖書は、私が日本に向け故郷を離れる直前にいただいたもので、それを下さった方のため、さらには神の言葉を再び教えるために日本で研鑽を積んだ喜びのため、私は非常に大事にしています。

日本を去る前に両目の具合が悪くなったため、あまりたくさん読むことができなくなりました。家に帰り着いて間もなく、さらにひどくなり、左目の視力を失ってしまいました。今、右目は見えますので、活字のはっきりしているものは読むことができます。しかしこの聖書は使っておりません。もっと大きな字で書かれたものが、必要です。もしあなたが英語が読めて、その聖書をお使いになりたかったら、そうしていただければ私はとても嬉しゅうございます。でももしそうでなかったら、神様の愛のメッセージを学びたいと願っているどなたかにお譲りください。

親愛なる子爵夫人よ、こんなに長い手紙であなたを煩わせてしまったことを謝らなくてはなりません。どうぞお許しください。

心をこめて
マーサ J. カートメル



この手紙が書かれたのは1930年の12月。世界中で大恐慌の嵐が吹き荒れていた時代である。

齋藤春子は海軍の元勲の一人といわれる仁礼景範の子女であり、東洋英和女学校への入学は創立翌年だった。1930年当時は58歳で、朝鮮総督であった夫・齋藤實とともにソウルに居た。

手紙の内容は、ミス・カートメルが教え子齋藤春子から翌年のカレンダーを贈られて大変喜んだこと、そしてお返しに、大事な愛用の聖書を譲りましょう、というものである。

この中で、ミス・カートメルは家族から85歳の誕生日をお祝いしてもらって平安に暮らしておられたこと、天国に行って先立った家族に再会することを喜びを持って待ち望んでおられたことがうかがわれ、全体から大変明るい印象を受ける。信仰に堅く立ち、長い一生を光のうちに歩み通してきた人の持つ清澄な明るさといったらよいだろうか。

また、大事な聖書ではあるが日本でひどく視力を落としたために読めなくなったことが書かれていて、どんなにか困難な状況を切り拓いて



「ミス・カートメル愛用の聖書」

カナダ 日本 カナダ 朝鮮 日本と海を渡り、今は学院史料として保管されています。

10月1日(追悼記念日礼拝の日)と11月6日(創立記念日)前後の一週間、本部・大学院棟の学院史料展示コーナーにて展示をいたします。

お仕事をされたことか、と思わされる。

聖書を託す教え子への丁寧な言葉遣いや周囲の人々への感謝の言葉があふれていることも印象深い。晩年「大したことはしていませんよ」とおっしゃり、耳も遠くなられていたがまだ人前に立って、はっきりとした美しい声で証をなさったと伝わっており、そうしたことからミス・カートメルの奥ゆかしく毅然とした人柄がしのばれる。

この手紙と聖書はセットとなって、創立者ミス・カートメルのゆるぎない信仰を私たちに示してくれる学院の第一級史料といえよう。

ちなみに齋藤春子は4年後刊行の『五十年史』に創立当時を回顧した文章を寄せたが、その2年後、二・二六事件で夫を凶刃によって喪うという悲惨な経験をする。しかし晩年は神様のお守りのうちにミス・カートメルと同じく平穩に99歳の長寿を全うした。

(史料室 酒井ふみよ)

(翻訳協力：大学教授・史料室委員
高橋 基治)

(なお「ミス・カートメルの聖書」については『カナダ婦人宣教師物語』の中でも紹介しています。)

新井 竹先生の思い出

朽木 久子

私は新井 竹先生には生徒の時と教師として英和に戻ってからと二度教えを受けました。残念ながら同僚としてではありませんでしたが、様々な折に適切な助言を頂きました。今でも忘れない言葉の数々を綴って先生の人となりの一端をお伝えできればと思います。

「今は必要ないと思ったことも後になって良かったと思うことが人生には沢山有るの」—これは私が進学しようか迷って相談した時の言葉です。昭和26年再び新任として私達高一の担任になりました。新任というのに年配の先生で吃驚しました。疎開から帰って来た人も多く学年3クラスで180名以上と生徒数が多いために問題も多く、担任はベテランの吉本先生、藤田先生と新井先生でした。私は先生のクラスではありませんでしたが、他の生徒と同様にいつも新井先生に様々なことを相談していました。二本榎のお宅が近かったので友達とお宅に伺ったこともありました。毎朝鳥居坂を上る先生の背中を友人達と押していました。

「英語は言葉だから覚えるしかないの」—授業中に御自分が英和生だった時の話もよくして下さいました。詩の暗誦や通訳の授業があったこと、ブー様ことミス・ブラックモアが厳しくも又優しくしたこと、寄宿舎ではお小遣い帳も英語でつけたこと、日曜日には麻布教会（現鳥居坂教会）に整列して出かけたこと等々。高二の時『赤毛のアン』が出版されて読み、先生の話の思い出して「昔の英和はカナダと同じだったのだ」と思ったことを憶えています。

「卒業生なのだから英和の歴史の良いことも悪いこともきちんと伝えなさい」—90周年に石井次郎院長の発案で『百年史』編纂を見込んで大学院の史料室委員会が出来、私は委員の一人に選ばれました。明治期の卒業生や退職なさった先生方に話を伺う機会があり、新井先生にも数回お話を伺いました。藤沢にお住まいの時に鶴沼さき先生とご一緒に鎌倉でお話を伺った時は「これを記録にするのは関係者が誰もいなくなってからにしてね」と断りながら、校長が宣教師から日本人に代わった頃のごたごたを話し

て下さいました。御自分が持っておられた写真や様々な資料も寄贈して下さいました。英和で最初の日光への修学旅行や、ミス・ブラックモアが長岡輝子さんの卒業問題で一人淋しく帰国する前に撮った写真等、資料として大切なものが多くあります。写真集の『110年史』にはもんぺ姿の先生が写っている運動場落成記念運動会の写真を入れました。

「こんな言葉遣いだったとは恥ずかしい」水野富美子先生と御一緒に大正期の学生生活を話していただいて「史料室だより」に載せた時、会話が文章になったのに違和感を覚えられ、以後文章にするのは認めていただけませんでした。

晩年に施設に入られてからも卒業生達は度々訪れるので、施設に迷惑をかけないようお互いに調整してお見舞いに伺ったこと、皆でクリスマスに讃美歌を歌ったことなども思い出されます。

いつも生徒に愛情を込めて接して下さいました先生でした。

(元中高部教諭)



新井 竹先生略歴

(あらい たけ)

- 1901年 9月25日 千葉県に生まれる
- 1920年 東洋英和女学校卒業
- 1924年 東京女子大学卒業
- 1924年 東洋英和女学校に就任
小学科のち高女科
(担当：英語 ～1944年)
- 1947年 自由ヶ丘学園講師に就任 (～1951年)
- 1951年 東洋英和女学院に再任 (～1963年)
- 2000年 8月29日 逝去 (享年98歳)

- 計3枚及び葉書1枚
- * 学年会資料 (1967年高等部卒)
 - * 写真 6葉 (水野菊氏肖像、1930年頃の生徒達、1980年代後半頃の深町正信師と英和関係者など)
 - * グリーン・ゲイブルス模型 (「赤毛のアン展」のため作成されたもの)
 - * ペナント (校章入り 1964)
 - * 甲子園の土 (横山和美さんより)
 - * 「カナダ・メソジスト教会婦人宣教師が拓いた東洋英和女学院の保育・保育者養成の特性の検証」2008 東洋英和女学院大学
 - * 「聖ヶ丘教会120周年記念誌」聖ヶ丘教会
 - * 『「配色」センスアップ講座—こちよい自分色の見つけ方』菅原令子著 (1985年高等部卒) PHP研究所
 - * 『へボン物語—明治文化の中のへボン像』村上文彦著 明治学院
 - * 『三死一生—大村善永自叙伝』大村善永著 ぎょうせい
 - * 『至宝の徳富蘆花』熊本県立大学編著 熊本日日新聞社
 - * 『ある明治女性の世界—周日記—日本初の海外団体旅行』野村みち著 (初期卒業生) 神奈川新聞社、『野村洋三傳』白戸秀次著 神奈川新聞社



卒業生の野村みち氏が1908年日本初の世界一周団体旅行に参加した時の旅行記。96日間和装を通し、英語を操る彼女は行く先々で人気の的となったが、曇りのない目で西洋の物珍しい事物を観察し、時には辛辣な文明批評も記している。彼女は

横浜の古美術商サムライ商会を、夫洋三の良き片腕として外国人客相手に切盛りしていた。『五十年史』『百年史』にも彼女の記録がある。

- * 『大正ロマン手帖—ノスタルジック&モダンの世界』石川桂子編 河出書房新社
- * 「オボン100—長野彌荘長生誕百年記念思い出帳」野尻学荘クラブ
- * 『「ハル」敬語考—京都語の社会言語史』辻加代子著 (1966年高等部卒) ひつじ書房
- * 『勝海舟 戦わなかった英雄』鶴澤義行著 ごま書房

- * 『メリー・ヘッセルの生涯 女子教育の先駆者』『カナンの風 日本人とキリスト教』北陸学院
- * 『中村学園百年誌』全3巻
- * 『関東学院125年史』『関東学院の源流を探る』『シーボルト日本植物図譜コレクション』関東学院
- * 「恵泉女学園短期大学誌 日本の女子高等教育への挑戦50年」恵泉女学園
- * 『125年のあゆみ (1884~2009)』頌栄女子学院
- * 「桃山学院創立125周年記念誌」桃山学院
- その他 他大学年史紀要 多数

移管資料

- * ボウエン・コレクション 『リトル・ガールズ』『愛の世界』エリザベス・ボウエン著 太田良子訳 (元本学教授) 国書刊行会
大学図書館より
- * 中高部宗教委員会関係 スクラップブック2冊、礼拝当番日誌、宗教教育日誌2冊、カセットテープ、栞状織物(5色)、ロウソクたて、アルバム(軽井沢追分寮開寮時)、アルバム「幼い日ここに育つ」 中高部地下倉庫より

購入資料

- * 『女性宣教師の日本探訪記—明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』齋藤元子著 新教出版社
- * 『ペトロ』川島貞雄著 (元本学教授) 清水書院
- * 『マッカーサー フィリピン統治から日本占領へ』『自衛隊の誕生—日本の再軍備とアメリカ』増田弘著 (本学教授) 中公新書
- * 『燈火節』片山廣子著 (初期卒業生) 暮らしの手帖社 (初版本)
- * 『楡家の人びと』上・下 北杜夫著 新潮文庫

お知らせ

史料室では、学院の歴史や学校生活をものがたる資料を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがあれば、ご寄贈いただくと幸いです。

お問い合わせ先は下記の通りです。

東洋英和女学院史料室 (法人事務局内)

03-3583-3166(直) FAX 03-3583-3329(直)

E-mail: archive@toyoeiwa.ac.jp